

身体についての一考察

—L. フォイエルバッハの「肉体と靈魂、肉と精神の二元論に抗して」論文に關説して—

○ 岡田 猛 (鹿児島大学教育学部)

感性 脳髓 身体 精神

1. 緒 論

身体活動は体育・スポーツにとって不可欠の契機である。従って、身体は体育・スポーツに関する諸学の研究対象を構成してきた。

体育哲学の領域においては、主に身心の相関というテーマを含みながら、身体についての論究が行われてきている。

本研究はL. フォイエルバッハの1948年の論稿「肉体と靈魂、肉と精神の二元論に抗して」をとりあげ、そこにみられる彼の身体論についての理解を試みるものである。

「肉体と靈魂・・・」論稿は、フォイエルバッハにとって彼の思想形成成熟期の著作であり、直接的には画期的論文「将来の哲学の根本命題」(1943)の説明を意図して著されたものである。

2. 実践論と認識論

“いかなる活動も精神と身体^{●●●●●}の作用によって実現する。従って精神と身体を分離して考えることは間違っている”といった趣旨の論述によく出会うことがある。しかし、そこには活動と考え、実践と認識という異なった次元を区別しないという点で問題を含んでいるように思われる。

フォイエルバッハは、身心の相関を考える場合に上記次元を峻別している。「人間を肉体と靈魂とに分離すること、すなわち人間を感性的な存在者と感性的でない存在者とへ分離することは、単に理論的な分離にすぎない。われわれは実践において、すなわち生活において、この分離を否認している」。

以下において、実践論からみた身体^{●●●●●}の位置づけをいくつかの観点から試みることにする。

3. 人間実存の根拠—感性—

「人間は彼の^{●●●●●}実存をもっぱら感性に負っている。理性や精神^{●●●●●}はもろもろの書物を作るが、しかしいかなる人間たちをも作らない」。このように人間の実存をその根底において規定するものが感性であるとされるのである。

諸^{●●●●●}感官は人間の本質をかくさず表現するという点で感性の現実性を保障するし、また諸^{●●●●●}感官は、母体から飛びだしてきた限りでの子どもをその対象とするという点で、感性の完全性を保障する。

ところで、感官は人間以外の動物にも存在するし、特定の感官においては人間以上に優れている動物だっているの

であるから、感性を人間固有の本質とすることができるのか、という疑問がでてくる。フォイエルバッハは、これに対して、動物は「制限された感覚主義者」であるのに対して人間は「絶対的な感覚主義者」—人間においては、このまたはあの感性的なものではなく、あらゆる感性的なもの^{●●●●●}が諸^{●●●●●}感官の対象になる—と主張する。

4. 脳髓作用と身心の関係

諸^{●●●●●}感官は客観的存在から刺激をうけると同様に胃・心臓などの作用もその客体として感覚する。しかしながら、脳髓の作用だけは人間から区別された作用として知覚されることはできない。

例えば思惟は人間が「神経組織の中心点としての脳髓」をもっていることを知らなくても可能であるが、しかしこのことから決して思惟がそれ自体においてもまたなんら脳髓作用でないということではでない。「私にとってはまだは主観的には純粹に精神的な作用または純粹に非物質的な作用であるものは、それ自体においてはまたは客観的には物質的な作用すなわち感性的な作用なのである」。

このようにみえてみると、フォイエルバッハにあっては、精神的作用を客観的に担保する物質的作用としての感性及びその総括としての脳髓に人間統合の原理としての位置を与えているといえよう。

5. 精神の位置づけ

精神と感性の関連を詳しくみてみよう。一本一本の現実の植物は感官によって捉えられるものであるが、植物そのものは精神によらなければ捉えることはできない。このことは一面での精神の超感性的性を意味する。

しかしながら、精神のこの超感性的性は決して感性から独立・分離していることを言表しているのではなく、個々の感覚の総括・統一を意味しているのである。「精神は単にあらゆる感性的なものを自分のなかにとらえるという理由で、感性的な何物でもない—すなわち一定の感性的な何物でもない—にすぎないのである」。

このように位置づけられる精神・理性は、感性に対して独自の貢献をなす。場合によっては錯覚をも生じる第一段階の外見的な感性は、推論という理性の力によって真実の感性に高められるのである。